

2012年2月28日～3月15日

ガーナ研修レポート

ミレニアム・プロミス・ジャパン・ユースの会



目次

挨拶—ガーナ研修を終えて	2
ガーナ基本情報	4
日程表	5
【Bonsaaso 村視察に関する報告】	6
【学生会議】	9
【各訪問機関についての報告】	
在ガーナ日本大使館	11
OHAYO!Ghana	11
味の素株式会社	12
JICA アクラ事務所	12
JICA プロジェクト現場	13
MVP オフィス	13
住友商事アクラ事務所	13
野口英世記念医科学研究所	14
UNU-INRA (国連大学アフリカ自然資源研究所)	14
帰国後に思うガーナ研修—メンバーによる振り返り	
藤沢祐未	15
奥山藍子	19
川本琢磨	21
徳川詩織	24

【挨拶—ガーナ研修を終えて】

2月28日より3月15日までの2週間、大学1、2年生を中心とするMPJユースのメンバー12名、そして鈴木りえこMPJ理事長を含む社会人2名の合計14名でガーナを訪問した。2週間というわずかな期間ではあったものの、実際に現地を訪れ多くの人々と交流したことで、大きな学び・発見を得ることができた研修ではないかと思う。

昨年度のルワンダ研修に引き続き、MPJユースとしてのアフリカ研修は今回で2回目となる。これまでもメンバーがMPJの視察に同行するという形でアフリカに渡航することはあったが、学生が主体となって研修を企画・実施し、また現地の大学生との交流などを含める形でアフリカ訪問を行うことで、学生のより大きな成長を目指すものである。前回のルワンダ研修、そして今回のガーナ研修においても、第一の目標であるこの点に関しては大きな成果を得たと考えている。

日本で「ガーナ」というとチョコレートを連想する人が多い。その点でいえば日本での知名度は非常に高いものがあるが、しかしその「ガーナ」がどのような場所なのか、どのような人が暮らし、どのようなものを食べているのか、知っている日本人は残念ながら多いとは言えない。かく言う私自身、英語圏であるということ、政治状況や治安の面もアフリカ有数の安定を誇っていること、また野口英世を通じた日本との関係もあること——実際に渡航先を選定するにあたって考慮したこれらの条件、あるいはそこに多少毛の生えた程度の知識しか持っていなかったと、恥を忍んでここに告白せざるを得ない。おそらく今回ガーナを訪れたメンバーのほとんども、同じような状況だっただろう。

そのような状況を何としても打破するために、昨年度以上に事前勉強会を充実させた。外部講師を招いた講演会、メンバーが各自で調べて発表する機会、そしてディスカッションなど、自分が実際に2週間を過ごす場所について調べているからか、普段の勉強会よりも気持ちの入り方が大きかったように感じた。リサーチ内容の充実に加えて、疑問に思ったことはすぐにメンバーに問いかけ、発表者と見解が異なる場合は（たとえ相手が上級生であっても）すぐに発表する、学年や専門の垣根を超えて活動するというMPJユースの特性が存分に活かした勉強会だったように思う。学年単位での活動が中心になりがちな学生団体において、この点は誇るべきものなのだろうと「手前味噌」ながら思う次第である。

研修からしばらく経っても忘れられないのが、ガーナの空港に降り立ったときのメンバーの緊張した表情だ。私以外の研修参加者は、ガーナはおろかアフリカに降り立った経験もない。中には初めて「途上国」に来たという学生もいた。ガーナについて勉強してはいたし、それなりの覚悟もできているつもりだった。ただ、いざタラップを降りてアフリカ

特有の熱気に触れた途端、その覚悟は不安に変わってしまったのだろう。本当に大丈夫なのだろうか、自分はここでちゃんとやっていけるのだろうか。空港からホテルまで 1 時間もかかっていないはずなのだが、チェックイン後には口ぐちと「疲れた」という声が聞こえた。長旅からくる肉体的な疲労もあるだろう、しかしそれ以上に慣れない環境に「放り込まれた」ことからくる緊張感が、メンバーに重くのしかかっていたのだろう。

誤解を恐れずに言えば、この経験、さらに言えばこれ乗り越えた経験こそが、メンバーが今回の研修で得た一番大きなものなのだろうと思う。慣れない環境に自ら飛び込んでいくこと、そしてそれに伴うリアクションを自分の身ひとつで真正面から受け止めること。自分の過ごす土地とは違う場所で過ごすこと、自分と異なるバックグラウンドを持つ人々と交流し議論すること、自分の想像のつかない世界に直面すること。漫然とした学生生活を過ごしている中では決して得ることのできない経験を今回の研修参加メンバーは得ることが出来たのだと思う。

そして研修に参加した私たちには、この経験を自分の中で、そして外部で昇華させる義務があるのだろうとも思う。確かに私たちが観たガーナそしてアフリカはほんの一面に過ぎない。たった 2 週間で「分かった気」になることは、無知であることより危険なことかもしれない。

しかし私たちは、少なくとも「一面」を見ることが出来たのだ。数多くの人たちの力によってこの貴重な経験が出来た私たちには、その恩に報いる責任がある。今は自分たちがこの経験を活かし、最大限成長することで、「恩返し」としたいと考えている。

研修責任者 國仲真一郎

【ガーナ基本情報】

- ・面積 238,537 平方キロメートル（日本の約 3 分の 2）
- ・人口 約 2,422 万人（2010 年：国勢調査）
- ・首都 アクラ（ACCRA）
- ・民族グループ アカン族、ガ族、エベ族、ダゴンバ族、マンプリシ族他
- ・宗教 国民の約半数がキリスト教徒、イスラム教約 15%、その他伝統的宗教
- ・言語 英語（公用語）
- ・政体 共和制
- ・元首 ジョン・エバンズ・アッタ・ミルズ（John Evans Atta Mills）大統領（2009 年 1 月 7 日就任、任期 4 年）
- ・主要産業 農業（カカオ豆）、鉱業（貴金属、非鉄金属）
- ・GNI 284 億米ドル（世銀：2009 年）
- ・一人あたりの GNI 1,190 米ドル（世銀：2009 年）
- ・経済成長率（実質） 7.7%（2010 年暫定値：ガーナ財務・経済計画省）
- ・通貨 ガーナセディ（1 ドル＝約 1.49 ガーナセディ（2011 年 5 月現在））
- ・総貿易額（2010 年暫定／ガーナ中央銀行）(1) 輸出 80.80 億ドル
(2) 輸入 110.38 億ドル
- ・主要貿易品目 (1) 輸出 金、カカオ豆・製品、木材
(2) 輸入 機械類、石油、食糧品
- ・需要貿易相手国（2009 年／IMF）
(1) 輸出 オランダ、ブルキナファソ、南アフリカ、英国
(2) 輸入 中国、米国、ベルギー、英国、仏

≪引用≫

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ghana/data.html>

【日程表】

- 2月28日 日本出国、ガーナ入国
- 2月29日 在ガーナ日本大使館表敬訪問、二階尚人駐ガーナ日本大使ご面会
- 3月1日 OHAYO!Ghana 田村芳一様ご面会、味の素株式会社 北村聡様ご面会
- 3月2日 JICA アクラ事務所訪問、稲村次郎所長によるブリーフィング
JICA 活動現場視察 (Okuapemman 小学校)
- 3月3日 クマシへ向けて移動 (バス、約6時間)
- 3月4日 クマシ市内観光 (Central Market 視察後、カルチャーセンター等へ)
- 3月5日 MVP オフィス訪問、プロジェクトに関するブリーフィング
(Dr. Joseph Mensah-Homiah)
ミレニアム・ビレッジ (Bonsaaso 村) 訪問
- 3月6日 jubilee park にて独立記念セレモニー参加
- 3月7日 アクラへ向けて移動 (同)、住友商事アクラ事務所 奥清人所長ご面会
- 3月8日 野口英世記念医科学研究所訪問
UNU-INRA 訪問、草刈康子氏、Ayuk 所長ご面会
- 3月9日 学生会議 (1日目)、文化交流
- 3月10日 学生会議 (2日目)
- 3月11日 学生会議 (3日目)
- 3月12日 Cape Coast 観光 (Cape Coast 大学、国立公園等訪問)
- 3月13日 ガーナ出国



今回の研修は学生会議、ミレニアム・ビレッジ訪問を2大柱とし、そのほか政府機関や教育機関、更には現地 NGO で活動したり、日系企業の現地事務所で働いたりしている日本人の方々を訪問した。多方面の機関・人を訪問し、お話を伺う中で、現地で活動することの大変さだけでなく、各人の自らの活動に対する気概を感じることが出来、研修メンバーにとっては非常に大きな刺激となったように思う。

【Bonsaaso 村視察に関する報告】

2012年3月5日、ガーナの首都アクラから北西へ250Kmほどに位置するガーナ第二の都市クマシ郊外にあるミレニアム・ビレッジ、Bonsaaso 村を視察した。最初に、村のプロジェクトチーフの方にビレッジに関するお話を伺い、その後ビレッジ内の各施設を訪問した。

＜ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトとは＞

ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトとは、2010年に国連で採択された国連ミレニアム開発目標（MDGs）をサブサハラアフリカで達成するために、コロンビア大学、国連開発計画、NPO法人ミレニアム・プロミスが村の支援を共同して行い、包括的支援のモデルケースを体系化させるための取り組みである。

現在、ガーナやルワンダを含む、アフリカの10カ国80の村々に住む極度の貧困層50万人を対象に、包括的な援助を行い5カ年で住民の自立支援を図っている。包括的な援助とは、農業、基本的健康、教育、電力・輸送・電信、安全な飲料水と衛生設備、の5つの面であり、プロジェクトではこの包括的アプローチによるMDGsの達成可能性を探っている。



＜なぜ Bonsaaso 村がプロジェクトの対象となったか＞

金鉱山の採掘や木材伐採に伴い土地が荒らされて道路環境が劣悪となり、他地域に比べて物資確保、通院等の交通が不便であったうえ、マラリアの罹患率が他に比べて高かったことが、要因の一部として挙げられていた。

【訪問先】

- ・ **学校** （生徒数 430 人、男女はほぼ同数。）

○プロジェクト導入前の状態

- ・ 学校給食は無く、生徒は慢性的な栄養失調状態。
- ・ 電気が通っていないため、昼間も暗い状態。
- ・ トイレは一つか、もしくは無い状態。



○導入後～現在

- ・学校給食の導入による栄養状態の改善。60%以上の家庭が給食プログラムに参加。
- ・電線が通り、明るい状態で授業が行えるようになった。
- ・男女別の簡易トイレの設置。
- ・生徒数の増加。(特に女子。)
- ・生徒の意識の向上。(全員が大学に行きたい、と言っていた。)



○問題点

- ・給食費を払えない家庭が出てきた。→対応策を模索中。
- ・教師の質の問題。
- ・小学校の絶対数の不足。(学校まで 5km 以上歩かなければならぬ子供もいる。)
- ・教材、道具の不足。

・ **カカオ農園**

○プロジェクト導入前の状態

- ・工夫などを特に行わず、ただ育てて収穫し、換金する、という単純な流れ作業。
- ・無計画な土地の使用による、土地の荒廃。

○導入後～現在

- ・品種改良や、栽培方法の工夫により、収穫量が3倍以上となった。
- ・二毛作、二期作などについての新しい知識により、土地に大きな負担をかけずに、長期間使用することが可能となった。

○問題点

- ・カカオのような換金作物の栽培への大きすぎる比重。
→自分たちが食べる穀物などの栽培の必要性。
- ・後継者不足。農家の高齢化。



・診療所

診療所は基本的に、midwife と呼ばれる助産士のような女性全体を取り仕切る。

私たちが今回訪問した診療所では midwife の方以外に、学生の看護師が 3 人、事務員が 3 人、地域保健士が 1 人いらっしやった。診療所で行われる医療行為は主に出産で、その他にマラリア、下痢、軽い傷の治療程度とのことであった。

○プロジェクト導入前の状態

- ・ 出産は自宅で行い、適切な処置が受けられず、死亡するケースが多数。
- ・ 出生前検診に来る妊産婦は 50% 以下。



○導入後～現在

- ・ 乳幼児に対する無料の予防接種（結核、ジフテリア、BCG など）。
- ・ 啓発活動の促進→
85% 超の妊産婦が、WHO で最低限必要とされている 4 回の出生前検診を行うように。
- ・ 地域住民が平均して 1 年に 1 回は診療所を利用。
→診療所の利用率が 4 倍に。
- ・ エイズの検査率が 3 倍に。→早期発見、治療に。
- ・ 村の外の大病院との連携。



○問題点

- ・ 診療所の絶対数不足。（30000 人の村に 7 つの診療所。）
- ・ 医療スタッフの絶対数不足。（看護師は学生の所も。）
- ・ 診療所と一般住居地区との距離が遠い上、道路環境は未だに劣悪なままである。
（雨が降ると泥沼のようになり、降らない時はすさまじい土埃。）



【学生会議】

3月9日（第1日目）	3月10日（第2日目）	3月11日（第3日目）
開会式	ディスカッション②	ディスカッション⑤
来賓スピーチ	ランチ	各班の発表準備
両国学生代表挨拶	ディスカッション③	最終プレゼンテーション
文化交流	中間プレゼンテーション	質疑応答
ディスカッション①	質疑応答	閉会式
（自己紹介、アイスブレイク）	ディスカッション④	

《来賓スピーチ》

Thomas Aquinas ADJADEH 博士（ガーナ大学）

草苺 康子氏（UNU-INRA 研究員）

《両国学生代表挨拶》

Maxwell ADJEI（ガーナ大学4年）

國仲 真一郎（東京大学4年、MPJ ユース代表（当時））

【概要】

ガーナ大学において、3月9日から3月11日の3日間に亘って「日本・ガーナ国際学生会議 (Student Conference of Ghana & Japan)」を開催した。



会議は「アフリカの発展のためには何が必要か」「そのために日本は何が出来るのか」という点に着眼し、参加者を「教育」「農業」「自然資源」「医療」の4グループに分け、それぞれのテーマからアフリカの発展、およびその過程での日本との関係に関するディスカッションならびにプレゼンテーションを行った。

日本側の参加者は東京大学からの11名、津田塾大学からの1名、あわせて12名。ガーナ大学からの参加者は University of Ghana、Ghana Telecom University、University of Cape Coast からの総勢25名であった。日本側の学生が主に1,2年生であったのに対して、ガーナ側の参加者は3,4年生が中心であった。

それぞれの参加者が専攻する領域は異なり、ディスカッションは各テーマに沿いつつも、



各人の専門領域や興味関心などを背景とした幅広い角度からのものとなった。また日本側の参加者は日本の歴史、あるいは現在抱えている課題などをガーナ側の学生に紹介し、そこから彼らが得られる“教訓”は何か、あるいは彼らの目には日本の抱える各種の課題はどう映るのかを聞くよう心がけた。

プレゼンテーションは各班で話し合った内容を共有するとともに別の班に所属するメンバーからも知見を得るという目的のもと、2日目および最終日の2度行った。2日目のプレゼンテーションは班でのディスカッション状況を口頭で発表し、それに対するコメントを受け付けるという形式で行った。また最終日のファイナル・プレゼンテーションでは各班がパワーポイントや模造紙に班での議論およびそこから導かれた「提案」をまとめ、発表した。質疑応答はどちらの回でも予定していた時間を大幅に上回るなど、参加者の積極的な反応が目立った。



また本会議の開会式に際しては、かつて岩手大学でも学び現在はガーナ大学で土壌学を講じる Dr. Thomas Aquinas ADJADEH、および UNU-INRA（国連大学アフリカ自然資源研究所）で研究員を務める草苺康子氏にそれぞれお話しいただいた。Adjadeh 博士からは学生が若いうちに異なる文化を持つ人々と交流することの重要性をご自身が日本に留学されていた経験などからご講演いただいた。また草苺氏には積極的に海外へ“打って出る”ことがいかに自分の視野を広げるかについてお話しいただいた。

開会式ではこのほかに「文化交流」として、日本とガーナそれぞれの踊りを披露したり、両側の代表がそれぞれの国について発表したりした。私たちは事前に練習した「ソーラン節」を踊るとともに、発生から丁度 1 年の日を会議最終日に迎える東日本大震災についてスピーチを行った。ガーナ側からはソーラン節に対しては大きな拍手が、また東日本大震災の説明に関しては数多くの同情の声、および質問が寄せられた。



【各訪問機関についての報告】

【在ガーナ日本大使館】

二階尚人大使と齊藤一等書記官は、内側から見たガーナ社会の実状と今後の課題を話してくださいました。政治・経済面での発展が進み世界からの注目を集めるガーナだが、国内の南北格差だけでなく都市の衛生状態の悪さや交通事故の多発といった問題を抱えており、これらの改善が課題である。私たちの研修はガーナ全体の現状を直視するには短い、限られた期間だが、得たものを今後活かしてほしい、とメッセージを下さった。



【OHAYO!Ghana】

OHAYO!Ghana Foundation は外務省の草の根・人間の安全保障無償資金協力により代替植物燃料「ジェトロファオイル」搾油施設建設プロジェクトを行っている。プロジェクトは、



1・農民に過度の期待を持たせない、2・リスクを負わせない、3・農民の自助努力促進、4・食料生産の増加支援、という方針を掲げている。継続性のある、総合的・複合的な支援を行うことで対象村落の貧困の解決、生活・経済の発展を目指し活動している。

【味の素株式会社】

味の素株式会社 CSR 部北村聡氏とご面会した。同社のガーナ栄養改善プロジェクトのターゲットは、現在ガーナで栄養不足が懸念されている、生後6ヶ月から24ヶ月の離乳期にある乳幼児である。日々共に働くガーナの人々は実務経験が少なく、行動力や決定力、構想力、先を見通す力、長期的視点、時間管理を苦手とするという。しかし、妥協を許さない態度を見せることで相互の信頼関係を築き、グローバル企業の社会的責任である自立発展の促進にもつながると、北村氏は語った。



【JICA アクラ事務所】

JICA のガーナ支援においては、「経済成長を通じた貧困削減」を基本目標とし、「地方農村部の活性化」及び「産業育成」の2つを援助重点分野としている。「地方農村部の活性化」の例としては、国産米の振興、アッパーウエスト州母子保健強化、基礎教育改善支援などを行っており、「産業育成」の例としては、中小零細企業振興支援、経済インフラ整備、産業人材育成などを行っている。さらにセクター横断的にこれらの開発課題に対処する観点から行政能力の向上・制度整備にも取り組んでいる。



【JICA プロジェクト現場】

JICA の教育支援プロジェクトを視察するため、Akropong 州の Okuapemman 学校を訪問し、青年海外協力隊として教師をされている福島祐介さんの理科の実験の授業に参加させていただいた。ガーナでは教師の一方的な説明に終始する授業が多いのに対し、JICA スタッフは実験等を通し生徒の学習内容の理解を深めている。学校のカリキュラムが確立していないといった問題点もあり、資金面だけではなく知的側面での更なる支援が必要である。



【MVP オフィス】

3月5日にミレニアムビレッジの事務所を訪問し、所長の Joseph Mensah-Homiah 博士からプロジェクトについての説明を受けた。まずはミレニアム・ビレッジ・プロジェクトの理念や方針、資金源などについて、更にその後 Bonsaaso 村の具体的な状況について農業、医療、インフラ、公衆衛生、教育の各方面から説明していただき、Bonsaaso 村でのプロジェクトの活動と成果について知ることが出来た。質疑応答では、ビレッジのスタッフがプロジェクトに関わるようになった動機について伺うなどした。

【住友商事アクラ事務所】

サブ・サハラアフリカでは資源ブームや内戦終焉により投資が増加、急成長に結び付いた。同地域の潜在的市場を見込んだ住友商事は、治安なども考慮したうえで西アフリカの拠点としてガーナを選んだ。ガーナでは、2007年に油田が発見され経済成長が加速した結果、国民の生活水準は向上しており、今後の消費需要の伸びには期待が高まる。しかし一方で、石油生産自体は伸び悩んでおり、経済基盤が脆弱であるという問題も抱えている。





【野口英世記念医科学研究所】

ガーナ大学レゴンキャンパス内にある野口英世医科学研究所の内部を視察した。1999年に日本の無償資金協力により建設されたP3レベル実験棟や、毒性研究室などを見学した。また、研究所で働く日本人研究員から、現在取り組んでいるプロジェクトの概要や、現地で研究を行う際の問題点などを伺った。

【UNU-INRA（国連大学アフリカ自然資源研究所）】

UNU-INRAは、自然資源に関するプロジェクトの統括を行う国連大学の機関である。さまざまなセクターが存在し、植物資源から鉱物資源まで幅広い分野を研究・調査するとともに、政府へのアドバイスや研究員の受け入れを行っている。数年後には博士課程や修士課程を併設する予定である。Ayuk所



長はお話の中で、これからの国際社会を担う人材は、自らの専門分野だけに固執せず、専門外の知識の獲得と運用を目指すことが肝要で、横断的な分野における仕事をこなせることが必要であると語られた。

【帰国後に思うガーナ研修—メンバーによる振り返り】

《藤沢祐未》（東京大学 教養学部 文科2類 2年）



日本とガーナ

ガーナでの日々は感動の連続だった。地面の色も空の色も、草木の形も街並も、もちろん歩いている人の肌の色も格好も、食べているものも、何もかもが日本とは全く違う。けれど、不思議な既視感を感じていた。写真でみたような風景がそのまま広がっていた。全くの異世界で共通するものは逆に奇妙に映った。風変わりな英語、日本の自動車、中華料理店。異世界じゃないんだなあ、とまた子供っぽく感動してしまった。

全く違う日本とガーナも同じ「国家」であり、今は主に「援助」というかたちでつながっている。現在日本はガーナをアフリカにおける援助対象国として集中的に支援を行っている。とりわけ医療セクター、産業育成に力を入れている。私が学生会議で担当した教育セクターは産業育成のための教育や理数科教育に分野を絞って支援が行われている。学生会議の事前学習として JICA の「日本の教育経験」という研究資料を読み、日本の教育セクターにおけるプレゼンスの高さを感じた。資料を通じて感じたことは、明治以前の初期条件や時代的な世界情勢の移り変わり、高度の経済成長など恵まれた社会背景が日本の教育制度の発展に大きく貢献したということと、一方で時々の課題に対応していく中央政府の政策・地域社会の活動の積極性も大きな役割を果たしたのだということだ。ガーナが自国の教育制度を改善していくうえで、日本の経験から学べることは多くあると思う。ただし、教育は国家の根幹に関わる重要課題であるから、日本から積極的に出ることにはできない。できることは、日本の教育発展過程をガーナに知ってもらうよう積極的に働きかけ、そして政策を多面的に考える材料を提供することだ。日本には、それができると感じたし、そうすべきだと思っていた。実際にガーナへ行き、村の視察や学生会議を経験してその思いが強くなった。「援助」でつながるならば、これからは「お金」ではなく「知識」が重要視

されるべきだ。日本なら、教育セクターにおいてプレゼンスの高い「援助（＝知識）」を与えることができる。

わたしとガーナの人々

村の小学生と接するときやガーナ大学の学生と接するとき、わたしは妙な遠慮を感じたり、逆にひどく傲慢だと思ってはずかしくなったりした。「先進国」の視点で、上から目線で話してはいけない、対等に同じ目線で話さないと、と考える度に、逆に「先進国」は優れていて「途上国」は劣っているという価値観に縛られている自分に気がつくのだった。どうしても居心地の悪さがぬぐいきれずに過ごしているうちに、いやむしろ縛られていて当然だし、縛られていても何も間違っていないのかもしれない、とも考えるようになった。だって、物が無いより有る方が便利に思えるし、汚いよりもきれいな方が過ごしやすいように思える。その価値観から問題視してしまえばそれはもう哲学の話で、また違う領域のことに思える。そうではなくて、自分の価値観を認めた上で、もう一歩歩み寄ることが大切なのだと思います。

例えば、学生会議での話だ。教員の質をいかに向上させるか、という議論において、教員の待遇改善や給与の増額、特権階級化を主張するガーナ人学生と、教員養成システムの改善と社会的な教師像の改善に重きを置くわたしたちの意見は相容れなかった。最初は、「そうやってお金でなんでも解決しようとするから問題を多面的に見れないんだ」とわたしは考えていた。しかし、話し込むうちにそれぞれの合理性を持っていることに納得がいった。社会環境が違うということは、そこにおける合理性も違う。まずは違う合理性の存在を認めることで一歩。けれどそれでは一生分りあえない。さらに、相手の合理性に自分は納得できるか、そして自分の合理性を相手に納得してもらえるか、挑戦することでもう一歩。そうやって歩み寄ることで協力がなしうるのだと思う。この会議でわたしは相手の合理性に納得できた。だから意見を尊重できた。残念ながら、わたしのつたない英語ではこちらの合理性をうまく説明できなかったが、次の機会がそれが課題だ。

もうひとつ、わたしの居心地の悪さを緩和してくれたのは、ガーナの人々の誇り高さだ。ガーナはサブサハラアフリカで初の、黒人による独立を成し遂げ、さらに安定した民主主義を行い、現在経済発展の直中にある。ガーナの人々は心から母国を愛しているようにみえた。それが勝手な遠慮を感じていたわたしにはありがたく、ガーナの人々を「かわいそうな人々」ではなくて対等な「仲間」や「ライバル」としてみられるようになった。

ガーナでの日々を通じて痛感したのは自分の精神的未熟さだった。勝手な戸惑いや遠慮、恥ずかしさは、「相手を尊重すること」「分かりあうこと」「協力」の本当の意味を理解でき

ていないことに原因があると思う。ガーナの人々とのふれあいの中で、少し精神的に成長したことは、これから世界中の人々をふれあう際に間違いなく生きてくる。日本では得られない貴重なものを得たのがわたしにとってのこの研修の最大の意義だ。

開発援助の視点から

研修中にさまざまなかたちで「開発援助」に携わる方々からお話をきいた。その中でとくに OHAYO! Ghana 代表の田村氏のお言葉が印象に残っている。相手が勝手なことをすれば怒って、そっぽを向いてやるけど、すぐに抱きしめて励ます。見捨てないこと。粘り強くつき合っていくこと。愛情をもつこと。NGO 活動における大切なポイントとして、何度もおっしゃっていた言葉だ。

田村氏のおっしゃっていたことは、もう少し固い言葉に置き換えれば、さして珍しい言葉じゃない。いくつか本をのぞけばちらほら見受けられる内容だろう。だが、「愛情を持つ」「抱きしめる」という言葉には、「対等に接する」とは違うもっと深い意味が感じられた。「対等に接する」という言葉の裏に見え隠れする優劣関係ともいうべきものがないのだ。初めは何気なく受けとっていた言葉だったが、改めてその意味を感じる出来事があった。

ミレニアム・ヴィレッジの小学校を視察したときのことだ。カメラを見てうれしそうに「撮って!」「撮って!」と言う子供たちにつられて、わたしもうれしくなって一緒にはしゃいでいた。すると、すぐ隣に男の子が現れてわたしに「money.」と言いつつ見つめてきた。その一瞬で現実に引き戻されたような感覚がした。はっとして、言葉に詰まってしまった。

もうひとつは、学生会議でのことだ。議論では問題認識の差がしばしば支障となった。同じ現状を見ても、わたしたちは「問題だ。」と考え、ガーナ人学生は「十分だ。」と考えていた。あとから聞いた話だと医療班でも同じようなことがあったそう。それぞれの合理性については上で述べたが、この場合も同様に、どうして問題だと考えるのか、ということをもっと理解してもらわないことに議論は進まない。そして「発展」を考えるならば、「問題」のないところに「解決」も「改善」もうまれない。こうした問題認識のズレが「開発援助」の失敗につながっていくのではないかと思った。

ひとつめの出来事を通して、「だめ」と言うことの、ふたつめの出来事を通して、わかりあうまでとことん付き合うことの重要性を感じた。そしてそのふたつの背景になくならないのが相手に対する「愛情」なのだと思う。形ばかりの支援は簡単だ。資金をあげ、何かを作ってやればいい。実は世の中に溢れている「自立支援」も同等なのかもしれない。どこか相手を自分から切り離し、その上で「対等」に接しようとしている。その後ろには

上下関係という前提がある気がする。けれど、同じ世界を共有し同じ地面に立つて行く「活動」はもう自分の人生と一体になってしまっている。否応なしに自分も一緒に歩いていくなかで、投げ出しようがない。そんな在り方を実現するのが「厳しき」と「長い付き合い」と「愛情」なのだろう。

さて、政府の開発援助を考えると、政府が上のような支援活動を行えるとは考えにくい。思えばアフリカにおける開発援助の歴史も上の話に似ていないだろうか。初めは「資金や物」ばかりが支援された。しかし、かえって状況を悪くして「自立支援」という形の「知識や技術」の支援に移る。だが、近年の動向を伺う限りこれも芳しい成果を上げておらず、「開発援助」の在り方が疑問視されている。わたしはガーナの人々を見て、彼らの生活を見て、そして「支援活動」の難しさを知り、これから政府はもっとビジネスパートナーとしてガーナを見るべきだと考えた。ガーナの人々は人懐っこく、妙なところに律儀で（結構ルーズでもあるが）、そして誇り高い。きちんと分かりあい、ルーズさをカバーしていけばパートナーとして期待できる。そしてガーナの市場は高いポテンシャルがある。彼らはオシャレ好きできれい好きだ。がめつくなくてゆったりしている。わたしはどこか日本人との相性の良さを感じずにはいられない。さまざまな潜在的ニーズがあるだろうし、購買力のポテンシャルは大きい。支障となるのは社会インフラや法制度や距離的拘束だ。そうしたビジネスのかたちづくりが今後進んでいくことを願う。

近年、圧倒的存在感を放っている中国。ガーナにおいても中国の存在は大きい。わたしたちも、まちを歩けば必ず「チャイニーズ」と声をかけられた。これがいつしか、道行く東洋人がみな「ジャパニーズ」と言われる日がくると、なんだか少しうれいのかも、と考えている。

《奥山藍子》（東京大学 文学部 行動文化学科社会学専修 3年）



猛烈な暑さと照りつける日差し、悶々とした熱気と排気ガスのおい。まだ記憶に新しいこれらの要素は時折私の夢の中で再現され、私は赤い土の鋭い熱さを足の裏に確かに感じる。

ガーナは私の考えていた以上に発展した国であり、正直に言えば拍子抜けしてしまったという感が強い。無論、私たちが歩き見ていた範囲は非常に狭いので国全体についてこのように形容するのは的外れなのだが、少なくとも対外向けに整備された地域はガーナがこれからますます近代化されていくことの象徴であっただろう。

ガーナでの二週間で興味深かった物事をノートに書き留めておいた。そのいくつかをここで紹介したい。まず、名前について。ガーナの人々は人に会うとまず名前を尋ねるが、その答え方には大きく分けて2つの方法がある。私の場合その2つとは”Aiko”または”Adjoa”である。ガーナの人々は生まれた曜日と性別で決められる14パターンの名前を持っていて、”Adjoa”は月曜日に生まれた女性が名乗る名前である。今回訪れた小学校でも子供たちはクラスメイトについてこの種の名前を把握していたが、私自身、同じ名前を持つ人に出会うとどこか嬉しい気持ちになり、これはアカン族のコミュニケーションに組み込まれた特殊な要素だと感じた。

服装についても私の当初の予想とは異なっていた。人々は皆Tシャツを着ているか、全員が民族衣装を着ているかのどちらかで地域により異なるだろうと考えていたが、どの地域にいても全員がどちらかに偏っているというよりは、人それぞれであり、ある日民族衣装を着ていた人が次の日にはTシャツを着ることもあった。ちなみにフォーマルな服装はスーツではなく、カラフルな生地にアディンクラという記号がスタンプされたシャツである。

人々と話しているうちにこれまであまり耳にしたことのない、ガーナ特有と思われる話し方に気づいたのでここに記しておく。その話し方とは”Ha, Haah”、”You get it?”という

相槌のような表現である。”You get it?”という表現自体は特殊とは言い難いが、私が特殊性を見出したのは”Did you get it?”等の同義の表現のバリエーションが見られないこと、そしてほぼ例外なく発音の際に語尾を下げる傾向があることである。この表現について不思議に思っていたのだが、小学校訪問の際に謎が解けた。小学校の教員がロケット制作の説明をしている間に何度かこの言い回しをするのを見たからである。他で英語を学ぶ機会のない子供たちもこの言い方を受け継いでいくに違いない。また、”Ha, Haah”という相槌について不思議に感じていたのは、本来の英語の似通った言葉が納得の相槌表現であるのに対し、ガーナ人の話の中では単に「えーっと」と同じように用いられ、その発音もまったく異なるからである。これについては日常で用いられているチェイ語の相槌がそのままの形で表れているのだろうと推測している。

今回の研修で、発展途上国を訪れる際に生かすべき反省を得たので簡単に記したい。まず、ものをあげるなかれということである。道で出会った人も子供も皆何かものを欲しがすがそれに応じてはいけない。これはよく言われることだが、実際に仲良くなった現地の人に（わたしたちにとっての）ちょっとしたもの、不要なものを求められたときにスッパリと断るのは少し難しいことがある。私は何度か足を運んだ屋台の母娘と仲良くなったのだが、彼女らは私の身に着けていたいろいろなものを欲しがった。あまりに欲しがるので結局日本のスナックを少しだけあげて引き上げたのだが、モノに執着した彼女たちの態度がややショックで部屋に戻ってからしばらく考えてしまった。やはり、何であれモノをあげるのは良くない。ある一部の日本人が発展途上国でモノを「ばら撒いたり」したら、その国の人々と日本人とのそれ以後の交流の型は、ある程度良くない方向に制限されてしまうだろう。そしてこれは将来的に発展途上国の発展を阻害することになるかもしれない。学生会議で印象的だったのはある一部のガーナ人学生が「我々は何もできないから外国がガーナの発展を主導すべきだ」となんの悪びれもなく言っていたことだった。モノをあげることがこの考え方につながるとはいえないだろうか。

結局のところ、私たちは外国においては常に部外者・観光客でしかありえないのだが、その第三者的立場だからこそ留意しなければならないことや客観的に考えられることがある。また、そういった状況だからこそ見えてくる自己の性質、自国の海外でのあり方がある。今回の貴重な経験に感謝しつつ、これから為すべき活動に思いを馳せたい。

《川本琢磨》(東京大学 教養学部 文科3類 2年)



長いようで短かった研修が終わった。人生初のアフリカ大陸。それも、2週間以上という長期の日程の中で学ぶことは多かった。ここには書ききれないかもしれない。当初、出発前には幸福とは何かを国際支援から探る研修にすると記していた。もちろん、これに関しても得るものは大きかったし、また別の視点も生まれた。まずは、最初のテーマであった「真の幸福と支援」に関することから話していきたい。この研修で最も印象に残ったのは、なんといっても2回にわたる小学校訪問である。小学校では、熱烈な歓迎を受けたことも印象的だったが、何よりも子供たちの幸せそうな笑顔が今でも忘れられない。彼らに、「毎日、楽しいか」と尋ねると、すべての子供が「今が楽しい」と答えてくれた。何が楽しいのか聞くと、授業から休み時間にするサッカーにいたるまで楽しいそうである。残念ながら今回は子供たちが実際に暮らしている家庭は訪れることができなかったのも、家庭での生活についてはしっかりとわからないが、学校に来ている子供たちの表情から推測するに、家事労働などで疲れきっているという感じはしなかった。それは、子供たちと一緒にサッカーをしているときにも切に感じたことである。ここで、本題に入りたい。彼らが「幸せでない」といえるだろうか。確かに、学校には十分な机といすや一人ひとりの筆記用具などが存在する状況ではないが、彼らはそこで学び、学ぶことに楽しみ、喜びを感じていた。何よりも、小学校の子供たちが学びを欲し、そして、その先の中学校や高校への進学を切に願っていたことには驚くばかりであった。日本の小学生にそこまでの意欲は見受けられないだろうし、実際に自分を振り返ってみてもなかったように思える。日本では中学校や高校に進むことが当たり前になっているためということもあるだろうが、それ以上にガーナの小学校の子供たちの学習への意欲を感じた。こうしたことから、学校教育という点では彼らは明らかに「幸せ」ではないだろうか。もし、ガーナ国内のすべての小学校が、僕が実際に見た小学校と同じ教育水準や環境に達したとしたら、その先の国際的な支援は

必要なのだろうか。僕には必要ないように思われた。しかし、必要ないといってもそれは、そこに住む人々を見捨てるということの意味するのではない。教育に関しては、それ以上は必要ないと言っているだけである。インフラや衛生状態など、他に改善すべき分野、そこに住む人々が最低限の幸福な生活を送れないような要素に対してはさらなる国際社会の支援が必要である。つまり、国際的な支援は包括的に行わなければならないし、各分野で柔軟に対応しなければならないということである。これは、この研修中、強く感じたことである。具体例を挙げると、小学校はきれいな校舎が建てられ、机やイスもあり環境も整っているにもかかわらず、その小学校にいたるまでの道が舗装されていなかったり、小学校には電気が通っていなかったりとインフラの不整備が目立つ部分があった。これも、インフラ、小学校を含めた包括的な支援を行うことができれば、うまく解決するのではないだろうか。その際には各セクターで効率的な予算の配分や短いスパンでの計画と長期的な目標とを組み合わせたプランを策定し、それにしたがって決まった予算で支援を行うことが必要である。その際に、あくまでも地域のニーズに合わせた目標を設定し、先進国の視点ではなくその国のその地域に住んでいる人の視点に立って物事を考え進めていくべきである。こうした意味で、ミレニアムビレッジのプロジェクトは非常に参考になるべきプログラムであると思う。今回、そのひとつであるボンサーソを訪れることができ、そうした包括的な支援の一部を垣間見ることができたが、日程的な問題もあり、残念ながら全体像をつかむにはいたらなかった。機会があれば、他のビレッジも時間をかけてゆっくり訪れ、視察しプログラムの全体像をつかみ、将来的な国際支援の方向性を探りたい。こうしたところで、今回のメインテーマの考察は終え、研修を通して他に考えたことを記して、このレポートを締めくくりたいと思う。それは、格差の問題である。ガーナは特に地域間格差、南北格差が激しい国である。今回、残念ながら北部地域は訪れることができなかったが、都市部としてのアクラやクマシと農村部としてのビレッジのあるボンサーソという比較は可能であったし、その中で格差も見て取ることができた。さまざまな格差を目の当たりにすることができたが、その中でも印象に残っているのは、医療事情の問題、薬の問題である。どういうことかという。まず都市部のこの目で見た現状から記すと、アクラ郊外のショッピングモールにはほとんどの薬が並ぶ薬局が存在し、また、クマシなどはバスで走っているだけでも多くの薬局を目の当たりにすることができ、薬も所狭しと並んでいた。一方で、ボンサーソで見た現状と言えば、小さい診療所が丘の上の人里はなれた場所であり、そこに豊富とは言えないような薬の備蓄が存在するのみであった。確かに、そこに薬は存在し、ワクチンなども保管されていたが、その診療所へ住民が出向く労力を考えると、十分とは言えないだろう。こうした意味で、都市部と農村部では薬の備蓄や販売に関して

大きな格差がある。都市部にある豊富な菓を農村部に持っていけば済むだけの話しかもしれないが、都市部には都市部なりの菓の事情があるし、インフラの不整備により北部地域の農村などには届けられないかもしれない。こうした格差を是正するためには、次のような考え方が有効ではないかと思う。格差是正のためには、最初に底上げを図るという考え方である。菓の例で言えば、たとえ余っているにしても都市部の菓を農村部に移動させるのではなく、農村部で必要とされる菓の需要をなるべく細かく地域別などに調査し、それに見合っただけの菓を国際社会の力を借りながら備蓄、保存するということである。菓を移動させる方法も一方で余剰があるときには有効であるかもしれないが、需要は変化する恐れがある。そうしたことも踏まえて、最低限は農村部、特に北部に菓を提供できる必要があるのではないだろうか。このように、現場で実際に見たことで格差是正に対する考え方も研修前とは変わることができた。以上、見てきたようにこの研修ではさまざまなことを手に入れることができた。もちろん、ここには書ききれないこともたくさんあるが、それはこれからの大学での生活や、その後の将来に向けてしっかり活かしていければいいと思う。アフリカを考えることはもちろんであるが、この研修で学んだことを日本に還元することも忘れないように心がけたい。実りある研修であった。

《徳川詩織》（東京大学 教養学部 文科3類 2年）



ガーナの真夏のような暑い日差しは、日本人の価値観に染まった私の殻を優しく取り払い、私のアフリカに対する、日本に対する、貧困に対する考え方に大きな刺激を与えてくれました。

アフリカでは著しく経済が成長しているという事実を私は頭で認識しながらも、目の前に広がるアクラの光景は信じられないものでした。環七通りのような大きな道路を自動車が次から次へと走り向け、いくつもビルが立ち並ぶ。宿泊先のホテルではキッチン付きの広々とした部屋に案内される。翌日に訪れたアクラモールというマーケットは完全にアメリカナイズされ、多くの人で賑わっており、一体ここはどこなのかと疑うほど「かわいそうで貧しいアフリカ」のイメージは一日にして早くも崩れ去ってしまいました。

このような経済成長を背景に、ガーナは今世界の注目を浴びています。私たちは研修中に、味の素株式会社の北村さん、住友商事の奥所長のお話を伺い、商社から見るアフリカについて学ぶ機会を得ることができました。北村さんによると、ガーナでは製造業における国際基準や知識が豊富で大変インテリジェントな方が多いけれども、インテリ層と富裕層がリンクしているためか、少々他力本願なところがあり、自発的に物事を実践できない傾向があるそうです。しかし、そのような人々を相手にしても、納期や時間を守るという点においては厳しく対処するとおっしゃっていました。なぜなら、一度つくった信頼関係を継続させることが仕事の効率を上げるポイントであり、ミスをした相手に反省させ改善させることが企業で働くことにとって大切であるからです。NGOや国の支援では大目に見るようなことも、興廃のかかっている企業であるからこそ妥協しないというのです。これまで私は、商社が自己利益を最優先にすることは理にかなっていると理解しつつも、貧困改善に貢献しようとしていない気がして、海外進出する商社に対しなんとなく嫌悪感を抱いていました。しかし北村さんの考えをお聞きして、企業が現地の人々の性格にまで与える影響力の強さを思い知りました。奥所長がおっしゃるように、アフリカは大きなビジネ

スチャンス秘めています。法外な進出を継続している中国に対し、日本企業が一丸となって堂々とビジネスを行うことが、日本企業やアフリカ各国の利益となるだけでなく、比較的情報の乏しいアフリカの人々に広い世界観を提供する好機になるのではないのでしょうか。

ここまでアフリカの明るい側面について記述しましたが、日本大使館を訪問した際に私が思い出したのは、大好きなサン・テグジュペリの著作『星の王子さま』の中での王子さまのセリフです。「大切なものは目に見えないんだよ」私たちは目で見ることが全てであると考えがちですが、見えない部分にこそ関心に向け続けなければ真実はつかめないのだと思います。日本大使館においても、大使は二週間の滞在でイメージを偏らせてはならないということを強調されていました。ガーナが西アフリカの中でどれほど特異な国であり、その中でもアクラがどれほど特別な都市であるかを、私は心に刻み今後のアフリカ観に反映させていくつもりです。まばゆい経済成長・欧米化に目を奪われるのではなく、その裏に隠れるアフリカの人々の生の声に、可能な限り耳をそばだてて生きていきたいと思っています。

また、この研修を通して、商社だけでなく途上国支援を行う NGO に対する考え方も少し変化しました。OHAYO GHANA FOUNDATION の田村さんのお話をお聞きして重要だと感じたのは、現地の人に興味を持ってもらうまで待つというゆるやかな姿勢と、今後はお金ではなく知恵の支援を行うべきだということです。途上国支援は、正しいという強い信念を持たなければ実践するのは困難であると思います。しかし「これが正しい道ですよ」と価値観を押し付けるのは先進国のエゴであると思うのです。小さな例ですが、私たちがミレニアム・ビレッジに指定されている Bonsaaso 村の小学校を訪問したとき、ある女学生に「WE LOVE JAPAN」と大きく書かれた T シャツを着てもらい記念撮影を行いました。そのとき私はその子に対し申し訳ないような恥ずかしいような気持ちを感じました。私たちは「WE LOVE GHANA」の T シャツを贈るべきではなかったのでしょうか。これでは彼らに「日本を愛することが正しい道です。日本を愛しています。」と無理に言わせているようなものです。これは完全に私たちのエゴであると思います。自分たちを愛してもらうために途上国の人々に働きかけるのではなく、彼らが自然に自分たちを愛してくれるようになるまで地道な努力を重ねながら辛抱強く待つことが、途上国支援に求められているのではないのでしょうか。こうした寛容な心を持ち、お互いの知恵を共有できるような支援を、私たちは追求していく必要があると思います。

こうした異文化理解の難しさは、JICA プロジェクトの活動現場の一つである Okuapemmann 学校を訪問した際にも感じました。そこでは子どもたちが人懐っこく手を

つないできたり、積極的に話しかけてくれたりして、こちらが元気をもらったような気がしました。先生の問いかけに元気よく返事をしのびのびと学習する彼らの姿を、日本も見習うべきではないか、そう考えていた矢先、気になる出来事がありました。私が彼らと同じ目線で話そうとひざまずいたところ、立ち上がったときにある女の子が小さな手で私の膝についた砂を掃ってくれたのです。私はそのとき、事前勉強会でお聞きした湯野澤さんのお話を思い出しました。「ガーナでは日本では虐待ともとれるほど大人が子どもを厳しくしつける」この文化の一端を、彼女の行為に見たような気がしました。それは豊かな親切心ととるべき行動だったのでしょうか。しかし「Thank you」と答えた私の心の中にはなぜか申し訳ない気持ちでいっぱいでした。青年海外協力隊としてガーナで理数科教師をされている福島さんは、勤務中最も辛いことに「ガーナ人の教師が悪いことをした子どもをむちでうつ」ことを挙げていらっしゃいました。水汲みや掃除などの家事を子どもが一手に担当するという、ガーナでの子ども観は、人生の先輩である大人に敬意を持って接することを子どもたちに教育する大切な文化なのかもしれません。しかし日本の価値観にどっぷりと浸かってしまった私の目には、どうしても彼らが愛おしく映ってしまうと共に、その文化はどこか行き過ぎているような気がしてしまいます。私はカカオ農園での児童労働にばかり注目してきましたが、本当は日々の生活の中で、伝統的・非組織的に児童労働が行われているのです。「異文化の理解」という言葉を、自分が今までどれほど軽々しく使ってきたかを反省させられました。結局のところ、正義の信念は人それぞれなのです。だからこそ、人々は臆することなく、積極的にお互いの考えを交換し合うべきであると思います。

ミレニアム・ビレッジに指定されている Bonsaaso 村の訪問では、村長との面会や小学校やカカオ農場、診療所の視察など様々な経験をさせていただきました。

ガーナの良いところは、伝統や他宗教を尊重していることであると思います。ミレニアム・プロミスが村の発展に携わったにも関わらず、村長とお会いする際にお互いに握手し合うという伝統がしっかりと守られていました。また、村の皆さんは異国人である私たちを温かく歓迎してくださいました。異文化を尊重する姿勢は、3月6日の独立記念式典においてもみられました。ガーナでは約7割の人々がキリスト教を熱心に信仰していますが、式典ではイスラム教の権威者のための席が設けられ、イスラム教信者のための誓いの言葉も読まれました。人々が深く宗教を信じている中で、宗教間・文明間の衝突もなく平和な暮らしを送ることができる彼らの寛容さは高く評価されるべきだと思います。

Bonsaaso 村では、以前は貧困に苦しんでいたとは俄かには信じられないほどに人々が幸せそうに生活していました。農家の方が、集落全体でカカオ農場を運営し成果を上げていることを、誇りを持って話してくださり、児童労働や農家の貧困といった暗い側面にばか

目を向けていた私のカカオ生産に対する印象は自然と和らぎました。また、村の実情に合わせて小学校が非常に多く設置されているように感じました。ただ Bonsaaso 村の小学校の子どもたちは、以前に訪問した Okuapemman 学校の子どもたちと異なり携帯電話の番号を教えてほしいとは言ってきませんでしたし、なんとなく笑顔が少ないような印象を受けました。「見えること」から伺える「見えない」貧富の差が存在しているのだろうかと思いを巡らせました。

こうした経験を通して交流するガーナの人々は、大変親切で陽気な方が多かったように思います。クマシを観光した際には、広場でサッカーをしていた子どもたちが見ず知らずの私たちをレストランに案内してくれました。何時間も付き合わせてしまったのに嫌な顔一つ見せず、車道は危ないからと言って私の手をひいてくれる彼らの優しさに、私は心から感謝せずにいられませんでした。日本人は見知らぬ外国人に対し彼らほどに心を開くでしょうか。通りすがりの「ダンスの好きな外国人女性」に民族舞踊を披露してくれるでしょうか。ガーナの温かく晴れ晴れとした風土が育む人々の純真さを、私はこれからも大切にしてほしいと思います。

一方、ガーナの国民性に関する課題も見受けられました。子どもたちにシャボン玉の道具をプレゼントしたときに、子どもたちの間で道具の取り合いになってしまったのです。私たちの「You have to share!」という声にも耳を貸してもらえず、なかば喧嘩のような形になってしまいました。私たちは彼らに日本文化を楽しんでほしいと思っただけなのに、このような事態になるのならプレゼントしない方が良かったのではないかと思っただけでした。日本では子どもたちがブランコの前に順番に並んで代わる代わる遊ぶという光景を目にしますが、ガーナではそのような慣習はないのかもしれませんが。チョコレート一つをとっても、日本では自分の属するコミュニティだけの利益になるように「思いやり」という名をつけてコミュニティ内で分け合って食べますが、ガーナでは自分だけが食べたいがために取り合いになってしまいます。こうした道徳的な部分の教育は家庭でなされるはずですが、親子代々の価値観がそうであるために、子どもの代から変化させるのは困難であると思います。屋台でヤムイモを売っていたおばさんやその娘さんは、「日本のものをプレゼントしてほしい」とユースのメンバーに声をかけていましたが、このような「先進国の人々は物を分け与えてくれる」という価値観も代々受け継がれることとなるのでしょうか。私たちは彼らに自分の価値観を押し付けることはできないし、せつかく培った友好の絆を断ち切りたくもない。少し話し合っただけで広く理解されるようなことでもありません。根本的な考え方の相違を彼らに理解してもらうためには、広い世界にガーナが気付いてくれるのを待つしかないのだと思います。時間はかかるでしょうが、それしか方法はないと考えま

す。ガーナの人々が世界に目を向け、自分たちとは違う暮らし方を感じ、自分たちを見つめることこそが最大の自己啓発であると言えるでしょう。そのために私たちにできるのは彼らの知る自由を積極的にサポートしてあげることなのだと思います。

そして、その前提とされる自分の英語力の未熟さを、痛感せざるを得ませんでした。学生会議でも、彼らの言動からガーナの国民性を感じることができました。彼らは自分の国を深く愛しています。平和的な政権交代が行われたことに代表される、民主主義的風土を誇りに思っています。貧富の差の解消という課題を認識し、はっきりとした自分の意見を持っています。そのような彼らの強い思いに応えたい、深い議論をしたいと切に願ってはいるのですが、なかなか彼らの英語を聞き取ることができず、また自分の考えを上手く伝えることができません。コミュニケーションの手段としての英語力を磨く必要があると、身に染みて感じました。今後は実践的な英語力の向上に努めていきたいと改めて思いました。

最後に、貧困について考えたことを記したいと思います。第一に、ガーナにおける貧困は、ワーキングプアではなく、雇用不足の漫然化が大きな原因となっているのではないかとことです。現地をバスで巡る際、男性の「井戸端会議」をよく見かけました。私には彼らが「汗水たらして一生懸命働いているが収入を得られない」人々であるようには見えません。働く意志が感じられないのです。雇用がないため、彼らには、自ら物を仕入れて売るか農業をするかというわずかな職業の選択肢しか与えられていないのではないのでしょうか。第二に、大都市ほど貧困を生む恐れがあるということです。私が3年前にマレーシアに行ったときは、クアラルンプールのマーケットで物乞いをする人々を多く見かけました。しかしクマシのケディティアマーケットではそのような人々は少なかったように感じます。ガーナはマレーシアほど都市開発が進んでおらず、極度の貧困に陥っても、近くに生えているマンゴーをもいで小道を歩いている鶏を捕まえて食料にすれば、生活していくことが可能なのだと思います。ガーナ北部の農村地帯は貧困層が多いと言われますが、農村の中での貧富の差は、大都市における貧富の差に比べれば小さいのではないのでしょうか。農村では農業を行うことにより少ないながらも皆が食料を得ることができますが、大都市で出稼ぎに失敗したホームレスの人々は他人に依存しなければ今日食べる食料もありません。このような貧困層の人々は目立ちにくくないがしろにされがちですが、都市開発を行う過程で、彼らにも焦点を当てていく必要があると思います。第三に、「貧しい=かわいそう」という構図はわたしたちの完全な思い込みであるということです。ぼろぼろの服を着て道端で水を売っている人たちは、決して「自分は貧しくてかわいそうな存在だ」とは考えていないと思います。彼らは水を売りながらも時々笑顔を見せ、等身大の今の生活

をそれなりに楽しんでいるようにも見えました。できるだけ楽をしてお金を稼ぎたいとは考えているでしょうが、彼らからは、頑として商品を売らねばならないという必死さは伝わってきませんでした。もちろん、貧困を認めるべきだというわけではありません。いずれにせよ、貧困に対する二元論的あるいはストレートな理解は危険であるということです。私たちは「ガーナ」と一括りにしますが、ガーナ内でもそれぞれの場所・環境によって人々は違った価値観を持っているということを認識して初めて、貧困について語る事ができるのだと思います。楽しく平和な生活を犠牲にした経済発展は必ずしも必要ではないと思います。大切なのは、あらゆる選択肢を提供することであり、最後の選択は本人に任せるべきであると考えます。

最後になりましたが、ガーナ研修を実りあるものにできたのは、MPJの皆様、各訪問機関の方々、勉強会に参加して下さった講師の皆様、ユースリーダーの國仲さんをはじめとするユースのメンバー等、多くの方々の支えのおかげです。この研修に関わって下さった全ての方々に深く感謝しております。本当にありがとうございました。ガーナでの二週間は、来月の成人を前に私の十代最後のビッグイベントとして人生のアルバムに記録され続けることでしょう。多くのことを教えてくれたガーナへ。Thank you, Ghana! I love Ghana!